

## 原水禁2023世界大会アピール

私たちは被爆から 78 年を迎えた今年の夏、コロナ禍以前の大会規模をめざしながら原水爆禁止世界大会を福島・広島・長崎で開催しました。毎年暑い夏を迎えるたびに、広島・長崎の被爆の実相を原点に、「核と人類は共存できない」という揺るぎない考えのもと、平和・核兵器廃絶・脱原発・ヒバクシャの援護連帯などをテーマに学び、理解を深め、とりくみの具体的な行動について議論してきました。この大会は、日常的な原水禁運動の礎となり、日本国内はもとより、世界の核廃絶を訴えるさまざまな運動とつながってきました。

核をめぐる国際情勢は、ロシアによる核兵器使用の威嚇発言やベラルーシへの戦術核配備等によって、これまでになく緊張状態が高まっています。5 月に開催された G7 広島サミットにおいては、核兵器保有と核抑止力なるものを一定認める文書しか採択できず、核廃絶や核軍縮に向けた歩みを進めることはできませんでした。NPT 体制による核兵器保有国は、第 6 条で「核軍備縮小への誠実な交渉を行う」と定められているにもかかわらず、いまだ世界には 12,000 発を超える核兵器が存在しています。被爆者がこれまで世界で語ってきた被爆の実相は、これらの核兵器使用を決して許さず、核兵器禁止条約の発効へとつながってきました。被爆国である日本は、直ちに核兵器禁止条約に批准し、核兵器廃絶を願う世界各国の先頭に立ち、すべての核兵器廃絶を実現させていくリーダーシップをとるべきです。安保 3 文書の改訂によって、敵基地攻撃能力を保有することは、これまでの「専守防衛」の枠組みを逸脱するものです。これまで非核 3 原則の法制化を求めてきた私たちは、核抑止力や軍事力によって、真の平和な社会は実現できないと確信しています。

本大会の大きなテーマである「被爆の実相の次世代継承」は、今後も国際社会において日本が果たすべき役割を考えると、待ったなしの喫緊の課題です。本大会に参加した高校生・大学生をはじめとする若い世代の学ぶ姿に、この先の原水禁運動の光を見出していきたいと考えます。

長崎において、被爆者と認められず「被爆体験者」とされている問題が、78 年経った今に至っても解決していません。「被爆体験者は被爆者だ」と、日本政府に一刻も早く認めさせなければなりません。また、被爆二世・三世課題の解決に向けてとりくみをすすめるべきではありません。原水禁運動は、被爆者援護法を国家補償としていく運動を継続し、世界のウラン鉱石採掘や原発労働者を含めた、世界のすべてのヒバクシャと連帯して運動を進めていきます。

核の「平和利用」なる原子力発電等の危険性についても、これまで私たちは軍事であれ「平和利用」であれ、「核と人類は共存できない」として、反対の立場を貫いてきました。福島第一原発事故から 12 年。日本政府は再び原発推進政策に舵を切りました。福島の避難住民への医療・介護費の減免措置の段階的打ち切り等、福島第一原発事故はもう終わった、収束したと言わんばかりの切り捨て政策を、私たちは決して許すことはできません。政府はすべての原発事故被害者の健康・医療を保障すべきです。

福島で今夏にも強行されるおそれがある放射能汚染水の海洋放出については、決して福島だけの問題にしてはならず、私たちが大会を通して議論する大きな柱の一つとして位置づけてきました。漁業関係者をはじめとした地元の反対もある中、この海洋放出を許してしまうわけにはいきません。

私たちは原水禁世界大会を開催し、各地域で奮闘する仲間存在を改めて感じ、ともにその方向性について確認する機会としてきました。これからも、今の国際社会全体が、そして日本が「いつか来た道」に再び戻ることがないように、反戦・反核の運動を続けていくことを決意し、原水禁世界大会全体アピールとします。

2023 年 8 月 7 日

被爆 78 周年原水爆禁止世界大会参加者一同